ISSN 0386-4790

国文学研究資料館報

第28号

昭和62年3月

データベースのオンライン検索

サービス開始に当って

小山弘志

この四月、すなわち昭和六十二年度から、当館はデータベースのオンライン検索サービスを開始することにした。実施するのは、当館所蔵のマイクロ資料目録と和古書目録との二つのデータベースである。

全国の大学、図書館・文庫や社寺など、また海外各地に所蔵されている、江戸時代末までの国文学文献資料を調査して、これらをマイクロフィルムによって収集することは、当館の主要な事業の一つであるが、創立以来十五年、その蓄積は約八万点に達し、刊行した目録は十冊となった。

これら冊子体の目録は、コンピュータに入力したものから版下を打ち出している。このたび、これらのデータの検索システムが開発され、オンラインサービスが可能となり、それとともに、当館所蔵和古書六千点についても、同様のサービスをすることができるようになった。

所蔵マイクロ資料は年々増加する。年一回刊行の冊子体の目録のみでは、やがて不便になることが予想されていた。当館はコンピュータのより一層の活用を心がけて来たが、何分にもコンピュータによる漢字処理は、昭和五十二年開館のころは未開拓の分野であったので、鋭意実験を重ね、今日に至ったのである。

当初はやや限定されたサービスであるが、逐次拡大しつつ改善を加え、また、準備の整い次第、他のデータベースのサービスも始める所存である。多くの研究者によってこれが利用されることを期待する。新しいことなので、不備な点もあると思う。運用上のことも含めて、お気づきの点を助言していただければ幸いである。

データベースオンライン検索について

準備室

一、データベースの内容

本年四月からオンラインサービスを開始するデータベースは、

①マイクロ資料目録データベース

②和古書目録データベースの二つである。

これらのデータベースはいずれも当館所蔵のマイクロフィルム資料、および文献資料(原本)の目録をデータベース化したものである。したがってこれらを検索した結果得られるデータの内容は、それぞれ冊子体の『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録』(毎年一冊計十冊刊行)『国文学研究資料館蔵和古書目録』(増加3まで計四冊刊行)を引いて得られるものと内じである。すなわち、マイクロ資料目録データベースについては、年次ごとに追加・累積した全データ約八五〇〇〇件の中から、書名及び著者名で検索でき、書名については統一書名からだけでなく記載書名でも検索ができる。また和古書目録データベース(約六〇〇〇件)の検索機能もマイクロ資料目録データベースの場合と同じであるが、検索の結果表示される項目は、残

一目次一

データベースのオンライン検索
サービス開始に当って…小山　弘志…1
データベースオンライン検索について…準備室…1
展望と共同研究……上田　真…5
文庫紹介⑧香稲荷神社文庫……5
新収資料紹介㉔絵本吾妻鏡……6
古典作品典拠ファイルの作成状況について(中間報告)……7
文献資料部事業報告……長谷川　強…7
研究情報部事業報告……棚町　知彌…9
整理閲覧部事業報告……本田　康雄…11
評議員会議・運営協議員会議等覚書……13
昭和62年度共同研究実施予定……14
第十回国際日本文学研究集会スナップ……14
利用者へのお知らせ……15
昭和六十二年度春季学会開催一覧……16

欠表示などマイクロ資料目録の場合よりやゝ多い。

各項目ごとのデータ内容の説明は、利用が承認された際に各利用者に送られる「データベース利用の手引き」（以下「手引き」という）に詳しく記載されている。

二、利用資格と利用形態

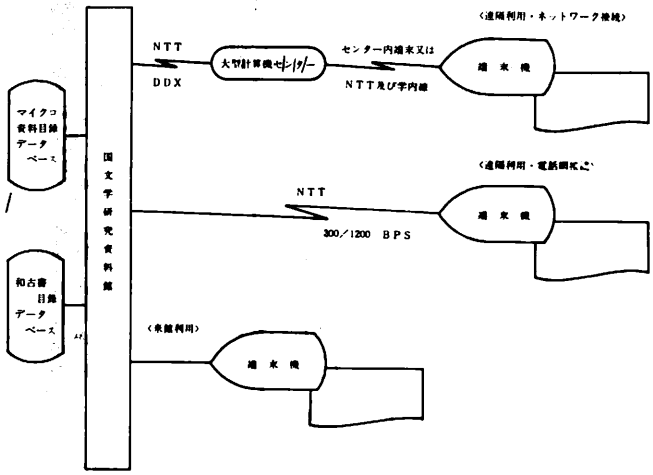
利用資格は、学術研究を目的とするということが第一の要件であるが、それ以外には当館の資料の利用資格をもつ者、すなわち、

①学校の教員及び調査研究機関の研究員

②大学の学生及び大学院の学生

③その他館長が適当と認める者

であれば利用できる。ただし後述するように利用に当って運用経費の一部に対し応分の御負担をして戴くことになるので、その保証手続きの関係上、利用形態によって現在若干の制約が置かれている。



(1)来館利用

当館に来館して当館の端末で利用される場合は、その都度、負担金をお支払い戴くことになるので、保証は不要で前記の資料を利用する資格を有する方はすべてデータベースも利用できる。

(2)電話網接続による遠隔利用

パソコンなどの端末装置から電話で直接当館に接続して利用するもので、この場合は、利用申請に当って、所属機関の経理責任者の保証が必要である。また学生の場合は指導教官を支払責任者とすることが要求される。

(3)ネットワーク接続による遠隔利用

大学の大型計算機センターを中心として運用している大学間ネットワークを利用して当館に接続するもので、この場合は若干のネットワーク経費が加算されるが、そのかわり遠隔地では通信費が格段に安くなる。しかし、利用申請に当って、まず大型計算機センターに対して、ネットワーク利用の承認を得なければならない。

三、利用申請と承認

来館利用の場合は事前の手続きは必要ないが、遠隔利用の場合は電話網接続、ネットワーク接続それぞれに応じてあらかじめ利用申請を行い、承認を得なければならない。申請の手続きは、関係機関にお送りした「利用申請の手引き」（必要な場合直接当館に請求されれば送付する。）に記載されている。利用申請が承認されると登録番号と利用のための「手引き」が利用者に送付される。

四、利用負担金

利用者は通信費のほかに、（従って来館利用の場合でも）運用経費すなわちランニングコストに対して応分の負担をして戴くことになる。六十二年度の料金体系でわかりやすいように実際の検索の一例を示せば、或る検索の場合

①来館利用＝端末接続一三分で、一四三円、（プリント代として二十三頁打ち出しで九二円（頁当り四円）加算）

②電話網接続＝一六五円であるが電送速度が遅いので三十五分を要し京阪地区からの場合は電話料四六七〇円が別にかかる。

③ネットワーク接続＝ネットワー

ク経費を含めると六四九円かかるが、通信料は当該地区の大型計算センターまでの通信料しかかからない。

といった程度の負担額である。

五、利用できる日時

利用できる時間は、原則として、午前9時30分―午後4時30分であるが、

土、日曜日、国民の祝日及び振替日、国家的儀礼に係る日、年末年始、および毎月の末日(その日が日曜の時は前日、ただし4月は28日)

は利用できない。そのほか業務上臨時に休止する場合もあるが、その際はニュースレター等で利用者に周知する。

六、実際の利用の手順

「利用申請の手引き」に従って申請し、承認された場合の実際の利用について以下簡単に紹介する。

六・一、利用に当って用意するもの

(1)来館利用

当館に来館して利用する場合は当館の閲覧カウンターに設置してある端末装置を使用するので、何も用意する必要はない。

(2)電話網接続による遠隔利用

手元のパーソナルコンピュータを利用する場合は、パーソナルコンピュータのほか接続装置(モデムかまたは音響カプラ)と通信ソフトウェアを用意しなければならない。また当然接続に利用する電話回線が必要である。

(3)ネットワーク接続による遠隔利用

各機関の情報処理センターか、または最寄の大型計算機センターが所有する端末装置を利用する場合は特に何も用意しておくことはないが、パーソナルコンピュータを使用する場合は電話網接続の場合と同じように接続装置、通信ソフトウェアおよび大型計算機と接続するための電話回線が必要となる。

六・二、データベース利用手順の概要

データベースを利用するためには次の手順が必要である。

①当館が所有するコンピュータに端末装置を接続する。(接続手順は前述した利用形態によって多少異る)

②当館のコンピュータに接続するとデータベースの一覧が表示され、そこで利用したいデータベースの番号を入力する。〈図1〉

③利用したいデータベースを選択すると、次に選択したデータベースに関する簡単な説明が表示された後、検索が可能な状態となる。

④そこで六・三で述べる検索手順による検索を行い、結果を表示させる。

⑤最後に検索を終了するときは終了コマンド「END」を入力する。終了コマンドを入力すると検索を終るだけでなく、使用した負担金額などを表示して当館のコンピュータから自動的に切断される。

六・三、検索手順

書名、または著者名から検索できるが、検索手順はおおむね次のようになる。

(1)書名(または著者名)を入力する〈図2〉

(2)該当する統一書名(または著者名)の一覧が表示される〈図3〉

(3)必要な統一書名(または著者名)を選択する〈図4〉

(4)選択した統一書名(または著者名)に該当する目録情報が検索される。ただしこの時点ではまだその内容までは表示されない。〈図4〉の①

(5)検索した目録情報を表示する。〈図4〉の②、③

当館データベースシステムでは、書名または著者名からの検索機能以外に、より高度な検索を可能とする前方／後方一致検索機能、論理検索機能、およびこれまでに行った検索内容の概要を知ることができる検索経過通覧機能などを用意している。これらの詳しい説明は「手引き」に詳しく記載されている。「手引き」はできるだけ判り易く記述するよう努力したつもりであるが、しかし何分最初のことなので、実施してみれば「手引き」の設明不足や、データベースあるいは検索システムへの御注文など不満足な点に気づかれることもあろうかと思われる。今後ユーザーの方々の御意見、御要求などにより、一層充実し、かつ使い易いものにするよう努力を重ねて参りたい。是非多くの研究者の方々に御利用いただき御指導、御助言を賜るよう準備室からも重ねてお願い申し上げたい。

現在、次のデータベースのオンライン検索ができます
1．マイクロ資料目録データベース
2．和古書目録データベース
3．終了
番号を選んで下さい：1

〈図１〉データベース一覧の表示と番号選択（下線部を入力する）

〈マイクロ資料目録データベース〉
当館がマイクロフィルムに撮影し収集した全国各地の大学・図書館・文庫所蔵の写本・版本の目録(「国文学研究資料館所蔵マイクロ資料目録」として年次毎に刊行しています)の書誌データを累積しデータベース化したものです
更　新　日：1987年４月１日
データ件数：85,000件
このデータベースの著作権は国文学研究資料館が保有します

書名または著者名を入れて下さい
1／トサニッキ　送信

〈図２〉書名（下線部）の入力

⇓

次の４件の統一書名が該当します、検索したい統一書名の番号を入力して下さい
1．土佐日記
2．土佐日記註
3．土佐日記抄
4．土佐日記燈
？　2　送信

〈図３〉統一書名の表示と選択（下線部を入力）

⇓

①4　1／B：土佐日記註
②2／DS　送信
③項目１

統一書名	土佐日記註(トサニッキチュウ) 0
著者名	加藤宇万伎(著)
記載書名	土佐日記(内)、土佐日記(扉)、土佐日記(外)
原本・函架番号	写　2冊(1066)
コマ数	98コマ
所蔵者・サービス区分	刈谷図(E)
請求番号	30－39－2
紙焼写真本	F358
収録目録	1976年

〈図４〉検索件数の表示(①)・表示コマンド入力(②)・検索結果表示(③)

展望と共同研究

日本文学における「終わり」の感覚

上田　真

伝統的にカタストロフィーや大団円を重んじる西洋文学や、起承転結を説いた漢文学に比べ、概して日本文学では作品の末尾に終結感が弱い。論理的に帰納された結論を欠く作品は、『源氏物語』から『豊饒の海』まで、日本文学史上に数え切れないほどあるであろう。芭蕉は去来に「謂ひおほせて何かある」と言ったそうだし、「私の小説はどこででも終ってゐるし、どこででも終ってゐないやうなものだ」と書いた川端康成の言葉もある。余情とか幽玄とかの伝統的な日本の美的理念も、それに通じるものであろう。終結感の弱いことが、日本文学の特色の一つと考えられるのではなかろうか。

このような見地から、日本文学における「終わり」の様相を調べ、その背後にひそむ要因を考えてみようというのが、われわれ共同研究チームの目的である。現在までに四回の会合を重ね、平安時代から現代まで種々の作家や作品が議論の対象となった。

文学作品の終結原理を理論的に研究することは、西洋では一九六〇年代から盛んになり、今ではかなりの成果が発表されている。日本では、各作品についての個別的な研究はあるけれども、総論的にはまだ未開拓な分野のように見受けられる。いうまでもなく、西洋文学批評の方法論をそのまま日本文学にもちこむのには無理があり、そのためこの共同研究にも何かにつけ困難が予想されるが、さしあたってこの分野における「地ならし」的な役割だけでも果せたらと考えている。他の研究者のかたがたのサジェスチョンも歓迎したい。

（スタンフォード大学教授・昭和六十一年度外国人研究員）

文庫紹介⑧

呑香稲荷神社稲荷文庫

岩手県の二戸市に呑香稲荷という名の神社があって、歌書をはじめ少なからぬ和古書がある、という情報を私共が得たのは、昭和四十七年の秋、当館設立の直後であった。当時、学習院大学におられた松尾聰教授を代表者とする文部省科学研究費の総合研究「日本文学の基礎資料の総合的地域的研究」の一環としてその資料を実見された佐藤喜代治氏（当時東北大）や片野達郎氏から、二十一代集の写本とか山家集・万葉集略解・古事記伝・土佐日記抄（寛文元刊）その他多数の刊写本が伝存する旨の報告を頂いたのであった。

そこで当館としては、神社側の御理解を得て、去る五十六・五十七の両年度にわたり、東北地方の調査員に同社の文庫に伝存する和古書（国書）を逐一調査して頂いてその全貌を把握すると共に、その全点を収集（マイクロフィルムに撮影）させて頂いた。

この文庫は正式には「稲荷文庫」と称し、現宮司小保内道彦氏の四代前に当る小保内定身（明治一六年没、以下故人には敬称略）がその父孫陸と共に主宰した結社「会輔社」の蒐書である。定身は『国学者伝記集成続篇』にも載る篤胤門の国学者で、心理学者の小保内虎夫（故東京教育大名誉教授）やローマ字論者としても名高い物理学者田中館愛橘は、その一族である。その蒐書は従って神道・政治に属するものも多く、もと六千巻あったと伝える（現宮司談）が、現在は国書二百余点、その他に漢籍も相当伝存する。

呑香稲荷神社は東北本線北福岡駅から徒歩約二〇分。祭神は宇迦廼御霊命・天照皇大神・誉田別命で旧県社。社伝によれば延暦二十年又は承和年間頃大物忌神社を勧請したのが始まりで、長徳年間に歌人源重之の母の託宣で福岡（二戸市）に遷座、天和二年小保内源左衛門が霊夢で現在の地に遷し、かつ源左衛門の子孫次郎が上洛して吉田社家となり、呑香稲荷の号を授けられたという。以後南部氏の尊崇あつかった。（主として角川地名大辞典による）。

本文庫のマイクロフィルムは、所蔵者名を「小保内道彦（稲荷文庫）」として処理、すでに利用可能である。

（文献資料部　福田秀一）

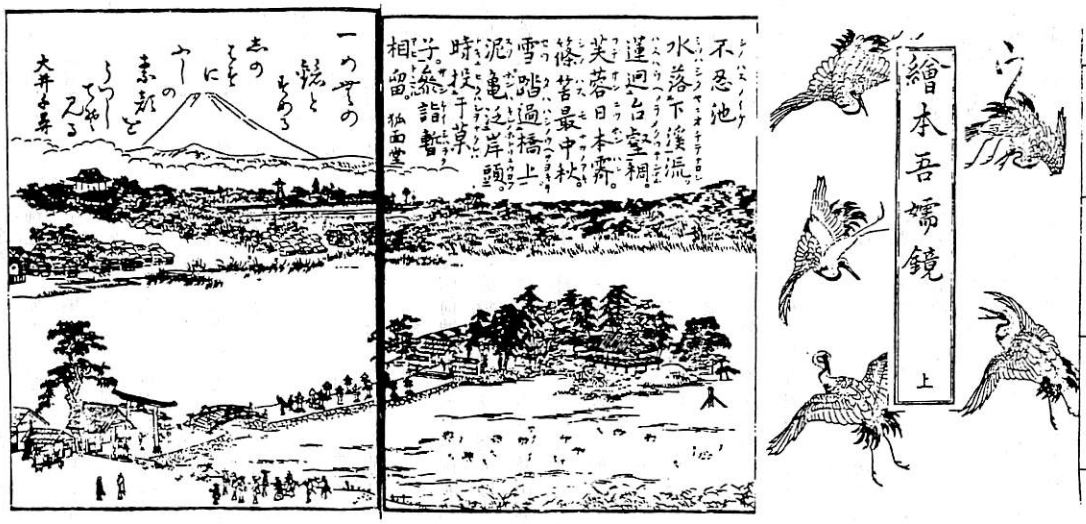
新収資料紹介㉔

絵本吾嬬鏡

半紙本三巻三冊、万象亭（森島中良）編、北尾政美画、編者序（丁未孟春／根元江戸前隠士／万象亭述〈印〉）、袋綴、原表紙砥粉色地に五羽―裏表紙は三羽―の鶴の飛翔する形を刷、縦二一・四糎横一五・二糎、本文単辺匡郭内一七・六糎一三・六糎、（上）序一丁半本文七丁半（中）八丁（下）本文七丁半附録江戸名所取組月池隠士戯作三丁半奥付半丁、原題簽双辺表紙中央一五・七糎二・四糎絵本吾嬬鏡　上（中）」「絵本あつま鏡　下」（原紅色褪色）、奥付「畫工　北尾三二政美圖（印）（印）／筆者天柱門人花女君美書（印）（印）／天明七丁未歳孟春寿梓／東都油町／仙鶴堂／鶴屋喜右衛門」、蔵書印「雙松園記」「準」。

上巻は三縁山（杜芳）愛宕山（森羅亭万葉意）浅草寺（二代目竹枝為軽）不忍池（狐面堂・大井千尋）日暮里（竹川街隠士・安遊民）飛鳥山（七珍万宝）王子稲荷（真かほ）根津権現（万亀亭）、中巻は牛島秋葉（小簾菅岐）三囲（七珍万宝）五百羅漢（雅郷）梅屋敷（千差亭万別）亀戸天神（万亀亭花江戸住）梅若（桜川杜芳）両国（式上亭柳郊）中洲（狐面堂）永代橋（鳴瀧音人）、下巻は真乳山（鳳仙堂）上野（天秤坊）新吉原（馬場金埒）深川八幡（普天安遊民）堺町（森羅亭万葉意）日本橋（頭万麻呂）高輪（竹杖為軽）目黒不動（大井千尋）と、根津・牛島・永代・真乳は半丁、あとは見開きで政美が景を描き、括弧に示した各人の狂詩・狂歌・狂文をその上に掲げる。絵は薄墨をかけてある。下巻末の「江戸名所取組」は行司姿の万象亭像と、「日本はし　一本まつ麻布」「富士見坂小石川するが台」など縁語で江戸の名所をつがえた五十五組を掲げた万象亭の戯作。万象亭の企画になる絵本であろう。漆山天童の『絵本年表』に薄墨摺は初摺という。刷は精良、手ずれも少く、表紙・題簽ともよく原姿を残した美本。

（文献資料部　長谷川　強）



古典作品典拠ファイルの作成状況について（中間報告）

「古典作品典拠ファイル作成事業」は、昭和五十九年度より五年計画で開始され、今年度は三年目に当る。初年度は全体計画の策定に費し、二年目にシステム開発を行って今年度、本格的な作業体制のレールが敷かれた。

「古典作品典拠ファイル」とは、日本の古典籍に関する総合的書誌目録として、現在最も包括的であり、国文学者、国史学者を始めとする研究者の利用も多い『国書総目録』（岩波書店、全八巻）の記載事項（所在情報を除く）をパンチ・入力し、形成されるデータベースである。典拠ファイルは、

①書誌的同定（ある作品と他の作品を区別すること）

②統一書名の決定（ある作品についての複数の異なった書名のうちから単一の代表的書名を決めること）

③作品の特徴の調査（巻冊数、角書、別書名、分類、著者名、成立年等）

などに不可欠のものである。そして、このファイルは、「古典籍総合目録作成システム」（印刷、編集の結果は、『国書総目録』補遺版に相当する）における著作典拠コントロール（個々の図書についての書誌データを同一著作のもとに統合して、目録を編集すること）のためのデータに利用される。

処理手順の概要は、①パンチ・入力項目の選定②区切り記号の付与③パンチ・入力④校正⑤データ修正⑥ヨミの付与（別書名、統一書名の一部）⑦形式変換⑧著者名典拠コントロール⑨古典籍総合目録データベースへの登録⑩データの最終チェック、である。パンチ・入力の一回分（約八〇〇〇件～九〇〇〇件）ごとに、この手順を二、三ケ月かけて行い年に四、五回分をこなす計画である。

以下、過去三年間の業務、実績を示す。

○昭和五十九年度

①全体計画の策定②形式変換システムの概要設計③パンチ・入力項目の選定、パンチ用原稿の作成④パンチ・入力―約三四、〇〇〇件（そのうち一部について校正）

○昭和六十年度

①パンチ・入力―約三五、〇〇〇件②校正及び修正―約三五、〇〇〇件③形式変換システムの開発④システムのテスト稼動

○昭和六十一年度（見込）

①パンチ・入力―約三七、〇〇〇件②校正および修正―約四〇、〇〇〇件③古典籍データベースへの登録―約二六、〇〇〇件

今年度データベースへ登録した著作データを用いて、既に一七、〇〇〇件の古典籍書誌データの著作典拠コントロールが完了している。

以上が簡単な中間報告であるが、次年度以降も、パンチ・入力一回分の処理期間の短縮を図りながら、『国書総目録』中の国文学関係の作品を中心とした十三万件の作成という当初の目標を達成したい。

（全体計画の概要は当「館報」第24号を参照されたい）

（整理閲覧部整理係　歌野博）

文献資料部事業報告

長谷川　強

学校にお勤めの方の卒論・入試とお忙しい時期より少し早く、年末年始は当部にとって多忙の時で、新年度の計画を立て、新しくお願いする調査員の方々についても案を出さねばならない。それが一区切つくと今度は今年度の締括りをつける作業が待っている。夏には夏休みのある学校の方々を羨んだ身は、今度は入試・卒論読みのないことを羨まれる順序になるはずであるが、実情はなかなかさようには参らぬ。

本年度も各図書館・文庫、御所蔵者や御関係各位の御好意と、調査員の方々の御協力とによってほぼ予定の調査・収集結果が出せる見通しである。改めて各位に御礼申上げる。

例によって次に昨年四月から本年一月末までの結果の報告を掲げるが、年度末までの結果や詳しい

点数等は『調査研究報告』や次回の館報に譲る。

昭和六十一年度国文学文献資料調査・収集の概況

一、調査

現年度は、本年一月末までに左の六五箇所（予備調査＝※印を含む）の所蔵資料計七四四点を調査した。なお、予備調査として※印を付したもの以外にも、展示を見ての報告など、当館としてのいわば正式な調査の手続きによらないものもあるが、それぞれ情報として有益なので記録保存することとし、ここにも掲げておく。

北海道東北地区（順不同、敬称略一部略称、以下同じ）

弘前市立弘前図書館・盛岡市中央図書館・鶴岡市郷土資料館

関東地区

彰考館・流通経済大学図書館（祭魚洞文庫）・茨城県立歴史館・矢口丹波記念文庫・永井義憲・東洋文庫・東京芸術大学附属図書館・東京大学国文学研究室・松宇文庫・法政大学能楽研究所（鴻山文庫）・宮内庁書陵部・大倉精神文化研究所・栃木県立博物館・栃木県立足利図書館・吉田屋鴨川館

中部地区

新潟大学附属図書館・上越市立高田図書館（榊原本）・高田市立中央図書館・金沢大学附属図書館・石川県立図書館（李花亭文庫）・武生市役所（寄託本）・長野市教育委員会（真田文庫）・上田市立図書館（花月文庫）・戸隠宿坊群・蓬左文庫（尾崎コレクション）・名古屋大学図書館（神宮皇学館文庫）・鶴舞中央図書館・愛知県立大学図書館（古俳書㈠）・大須文庫（真福寺）・刈谷市立刈谷図書館・神宮文庫・龍光禅寺・名古屋市博物館・名古屋市豊清二公顕彰館・名古屋市熱田社会教育センター・定光寺・西明寺・大樹寺・妙興寺・諏訪市立図書館※・高遠町文化センター※

近畿地区

西教寺・舞鶴市立西図書館・園部町教育委員会（小出文庫）・立命館大学附属図書館・大方保・陽明文庫・大阪女子大学附属図書館・浄照坊・温泉寺・大和文華館・広瀬神社※・奈良県立奈良図書館郷土資料室・東大寺図書館

中国四国地区

萩市立図書館・西円寺・松本真一・大洲市立図書館・四国女子大学附属図書館（凌霄文庫）・高知県立図書館（山内文庫）

九州地区

佐賀某家※・島原図書館（松平文庫）・某個人（長崎市・俳書）※・臼杵市立臼杵図書館

二、収集

本年一月末までに左の二六箇所の所蔵資料計五三九六点を収集した。

北海道東北地区

弘前市立弘前図書館・秋田県立秋田図書館

関東地区

東洋文庫・東京芸術大学附属図書館（脇本文庫）・東京大学総合図書館・松宇文庫・学習院大学国語国文学研究室・東京都立中央図書館（加賀文庫）

中部地区

金沢市立図書館（稼堂文庫）・加賀市立図書館（聖藩文庫）・上田市立図書館（花月文庫）・金城学院大学附属図書館・名古屋市蓬左文庫（尾崎コレクション）・刈谷市立刈谷図書館（村上文庫）・新城市教育委員会（牧野文庫）・大須文庫（真福寺）

近畿地区

舞鶴市立西図書館・園部町教育委員会（小出文庫）・陽明文庫・大方保・温泉寺

中国四国地区

多和文庫・今治市河野信一記念文化館・高知県立図書館（山内文庫）

九州地区

熊本大学附属図書館（北岡文庫）・臼杵市立臼杵図書館

海外資料の調査・収集

来年度は米国東部の蔵書事情について科学研究費補助金（海外学術調査）を申請中である。海外調査は当初より当部の者だけでなく、現地の事情に通じておられる方、関心の深い方を外部よりお願いしている。情報御提供とともに、今後も御協力をお願いする。

先年同じ科研費で調査したカリフォルニア大学バークレー校蔵書は、旧三井文庫蔵写本及び長谷川・渡辺の手控えによる版本の希望リストを作製して一万五千コマの撮影をお願いしている。また整理閲覧部の岡助教授が同館の版本目録作製のために渡米、昨秋帰国したが、その選定による同館蔵仮名草子フィルム三一点の寄贈を同館より受けた。先年科研費で購入のフィルムは来年度は公開の予定であるが、右記についてもやがて公開されるであろう。改めて館長シ

ャイブリ教授や館員各位に感謝申上げる。

松宇文庫・抱谷文庫等

本年度より三年計画で「寺院所蔵日本文学関係資料の所在に関する基礎的研究」のテーマで科学研究費補助金を受け、本年度は関西を主に調査、今後の収集に生かして行きたい。

松宇文庫は二年間の計画通り調査・収集を終り、昨秋講談社に書物をお返しに参上した。これも整理が済み次第公開されることになろう。また関係者により目録の作製も考えられているようである。俳諧研究の大きな推進力となるであろう。講談社・調査員各位に御礼申上げる。

演劇研究の権威であられた大久保忠国氏は昨年十一月御逝去になったが、御蔵書（抱谷文庫）を御遺族の御好意で調査させていただくことになり、二月より着手する。これも演劇研究に寄与するところ大と考える。御遺族の方の御芳情に御礼申し上げる。

第四室

本年度は松宇文庫調査の第二年に当ったので昨年に引続いて早稲田大学の雲英末雄教授をお願いして、御尽力をいただいた。併任助教授には前号に記した通り、前期は菊地仁氏（山形大）、後期は田村憲治氏（愛媛大）にお願いし、寺院資料の調査に御協力をいただいた。

地区会議

本年度は去る十一月七日に中部地区を金沢で、中・四国地区を広島で開き、有益な情報・御意見をいただいた。後者は旧調査員の広島市御在住の方にも御出席をいただき、多くの御助言・御教示を得た。御多忙中御出席下さった各位に御礼申上げる。

その他

一月十八日に福田がハンガリーのブタペストに向けて出発した。同地大学にあって日本学の振興に協力、八月末帰国の予定である。

また新年度には二三顔触れが変ることが予定されている。長期出張者とあわせて、調査員その他各位の応接に不行届が生じるかと思う。よろしくお願申上げる。

以上新年度にも変らぬ御援助・御協力をお願いして御報告を終る。

（文献資料部長）

研究情報部事業報告

棚町知彌

データベース・サーヴィスの開始を間近にひかえての諸準備、また、国文学年鑑の作製におけるCTS（コンピュータ・タイプセッティング）導入に伴ない必要となった新しい種類の作業の手順化など、多くの課題をかかえて慌しい半年間であった。

情報室

館報発行・新聞情報収集などの業務をおこなうとともに、第十回国際日本文学研究集会開催を担当した。三月に会議録を刊行する。

編集室

『国文学年鑑』（昭和六〇年版）の編集を行い、例年のように三月至文堂から刊行する。

この六〇年版の年鑑から「学界展望」の掲載を止めることになった。「学界展望」は、『国文学研究文献目録』を『国文学年鑑』に改めた昭和五十二年版以来継続してきたものであるが、各時代の全分野にわたる展望を行うことは、間口が広いので執筆される委員の負担が大きく、学会等が行う専門分野ごとの展望に比してやや不徹底なものになることは避けられない。一方論文数は年ごとに増加し、年鑑も部厚く高価となる傾向にあるので、基本的な研究情報である目録等の作成に重点を置くこととしたためである。

また今回から目録部分の印刷にCTS（コンピュータ・タイプセッティング）を採用し、基本データを入力し、コンピュータで年鑑の版下を編集割り付けして印刷するとともに、毎年のデータを蓄積してデータベースを構築できるようにし、年鑑作成とデータベース作成の作業の統合化を進めた。このため昨年臨時に編成した臨時論文検索室を吸収し、編集室の体制の整備が行われた。

情報処理室

今年度の作業計画は、①業務システムの見直し、②業務システム開発の見直しと省力化の検討、③今年度開発すべき業務システムの選定、を主たる目標とした。

(1)既開発の情報処理システムの見直しと運用

ハードウェアシステムについては、来年度からのデータベース公

開に備え、通信制御装置を通信制御処理装置に置き換え、同時に収容可能な回線数を12回線（公衆用8回線、構内用4回線）とした。また、磁器ディスク装置を1台増設し、ユーザボリュームの不足を解消した。

画像処理装置として、APOLLO社製DOMAIN DN3000を購入し、昨年度購入した同社製DN300と接続した。

さらに文部省科学研究費補助金でGraphica社製M－1006を購入し、資料の取り込み、表示、蓄積などを行った。

昨年度参画した大学間コンピュータネットワークに対してサーバホストとしての運用体制を確立すべく準備を行い、61年12月より試験運用に入っている。

ソフトウェアシステムについては、通信制御処理装置用ソフトウェア、システム開発支援ソフトウェア、エンドユーザ向けデータベース操作言語等を導入した。当室開発ソフト群の全面的見直しと改善の検討及び一部実現化を行った。これらに関して、システム運用を統合的に管理するための方策立案と分析及び評価を行った。

大多数の業務システムでは、すでにオープン処理への移行を開始しており、省力化に寄与し得る成果もあった。これらの作業は、従来のバッチ処理型のシステムを、会話モード型での処理へ書き換えるという方針で再整備をはかった。

本年度の重要な問題の一つに、文字選定作業がある。本作業は、一次情報としての文字の選定に極めて深い専門的知識を要する。また、外注に対する納期、経費面での制約などが出現してきており、広く館内の協力を得る必要がある。このために、本作業のあり方について、情報処理システム専門委員会で審議をお願いし、文字選定委員会という形で実現して頂いた。今年度は、納期等の制約から、マイクロ資料目録を主とする外字4字を作成するに止まったが、選定作業は、約70字について終了している。

(2)システム開発

下記のように六件実施した。

年度当初において

①古典籍総合目録システム

②逐次刊行物目録作成システムオンラインシステム

③運用管理システム

④データベース公開システム

⑤マイクロ資料目録作成システム改造

の五件としたが、年度途中において、マイクロ資料目録累積データの齟齬が発見されたため、この対策として、

⑥マイクロ資料目録データ一貫性維持システム

を開発することとなった。

古典籍総合目録システムは、試行版目録作成システムの開発を行った。これにより、現在まで累積された書誌、著作、著者等のデータが目録という形で利用可能となった。次年度以降、検索システム等の開発に着手するための体制整備が完了した。

逐次刊行物目録作成システムオンラインシステムについては、昨年度まで使用していた、バッチ処理中心のシステムを全面的に見直し、エンドユーザが運用を直接管理することを目標とするシステム開発を行った。結果的には検索・出力まわりに力点をおいたシステムとした。

運用管理システムについては、利用者の要求定義からプログラム作成までを一貫して管理し、運用管理データを採取する開発環境的なシステムとして開発を行った。利用者とデータベースシステムのインタフェースからプログラミング言語までを開発する大規模なシステム設計を行い、その一部を実現した。

データベース公開システムは、昨年度から検討されてきたシステムであるが、必要最小限の機能の実現がなされた。今年度はマイクロ資料目録データORIONローダ、和古書目録データORIONローダ、検索システムの利用者向けオウンコーディング等の開発を行った。データベース公開については、著作権、システムセキュリティ等の問題もあり、次年度以降順次システム拡張を行っていく予定である。

最後に、国文学研究に密着した計算機利用の課題は、今年度未着手であった。次年度以降の重点課題の一つとしたいと痛感しており、館内外の国文学研究者の協力を得て、対応をとってゆきたい。

（研究情報部長）

整理閲覧部事業報告

本田康雄

『マイクロ資料目録』は、当館の開館に際し第一冊目を刊行して以来、年一冊のペースで刊行を続け、本年三月出版予定の一九八六年版は第十冊目にあたる。この間に収載された書目数は累計で約八万五千点になり、次年度以降も年一冊（約九千点収録）継続刊行することを考え合せれば、当館の設置目的である「国文学に関する文献その他の資料の調査研究、収集、整理及び保存」の面からも、また当館と利用者を繋ぐ主要な媒体であることを考えても、多くの業務の中でこの目録作成の占める位置は根本的に重要である。

一方、設置以後次第に増加した当館所蔵原本についても『和古書目録』を増加3まで四冊刊行し利用に供している。この間の収載書目数は約六千点になる。

これらの目録はいずれもコンピュータ処理によって作成したものであり、研究情報部情報処理室の協力を得た。

昭和六十二年度からオンラインサービスを開始するマイクロ資料目録データベースと和古書目録データベース（書名及び著者名から検索）は、それぞれの目録データの集積された成果によるものであり、整理閲覧部はデータ作成部門としてサービスにあたり必要なデータ整備を担当するとともに、検索システムの開発等に協力した。今後とも、各方面の御意見を参照して、オンラインサービスと目録作成のためのデータ作成、整備を行ってゆきたい。なお、整理閲覧部がその総合受付を担当する準備をすすめている。

また、昭和六十年度から実施した保存用ネガフィルムの外部保管委託にともない十一月に実施された監査に際しては、監査実施要領に基づき当部からも検査員を派遣し、寄託したフィルムの保管状況等を検査した。

この他、当部が担当する業務（資料の受入、整理、保存、利用サービス及び参考業務、公開講演会の開催、展示等）は順調に進展した。

(一)整理閲覧室

以下に各業務毎に報告する。

(1)受入業務

六十一年十二月末における今年度の資料受入数は、マイクロ資料七九〇リール・三九箱、図書一、二九〇冊、逐次刊行物四、二八二巻号冊であった。

(2)古典籍総合目録作成事業

書誌データ（当館の整理方式によって全国の文庫・図書館の所蔵目録から転記し作成する。ただし、国書総目録に採録された以外のもの。）約一万件を作成した。この結果、昨年度までに作成したものと合せて約九万件の書誌データが累積されている。このうちの約七万件については、点検及びパンチが完了した。

また、約二万五千件の書誌データについては、データベースに登録し、著作コントロール（同一書のとりまとめ。特定の作品に関する諸本・諸版を同一の作品としてとりまとめ、書誌データと著作データとを結びつけること。）を行った。

著作データは、目録編集に際して同一書をまとめるための作品名に成立年等の当該作品に関する情報を付したものであるが、書誌データに対応して約三万五千件の著作データを作成した。このうち、約二万五千件については、今年度から稼動している古典作品典拠ファイル作成システム（別項参照）によるものである。データベースへの登録は、既存分を合せると約三万一千件が累積されており、これらは全て著者コントロール（同一著者のとりまとめ。作品に現れる種々の別称、雅号などを統一著者名でまとめ、同一の著者が著した作品を一括するための手当。）が済んでいる。著者コントロールを行うために、新規の著者千二百件を作成・登録した。また、約二千八百件の著者別称を追加した。

(3)整理業務

『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八六年』のデータ作成、入力、校正、編集作業を行った。二十八文庫、約八、四〇〇点収録の予定である。

『国文学研究資料館蔵和古書目録』は、今年度、累積目録を作成する計画で、作業を進めている。昭和五十六年に刊行した、それまでの十年分の目録、その後の三冊の増加目録に今年度受入分百点余を加えたものであり、四十七年の

創立から六十一年度までの十四年間に、当館が受入れ、所蔵している約六、〇〇〇点の和古書のすべてを網羅した目録ということになる。

昭和六十二年四月一日よりデータベース・オンライン検索サービスが実施される予定で、当面、『マイクロ資料目録』、『和古書目録』のデータが検索の対象になる。そのために、データの整備作業も平行して行っている。『マイクロ資料目録』では、アクセスポイントである統一書名、統一著者名を中心に整備に努め、ほぼ完了の見通しがついている。『和古書目録』は、累積目録の作成も兼ね、現物の再点検を含めた見直し作業に全力を挙げている。

また、データベース・オンライン検索のためのシステム開発について、情報処理室と打ち合せを重ねた。検索方式、画面レイアウト等において、使い勝手のよいシステムにすべく、データの性格を踏まえて検討を加えた。詳細は別項に譲る。

新刊書の整理、和古書の補修は例年通り進めている。貴重書に六点があらたに指定され、特別コレクション「国学者自筆稿本等」に九点が追加された。詳細は「利用者へのお知らせ」を参照されたい。

また、五年計画の三年目を迎えた古典作品典拠ファイル作成事業については、別項に中間報告を行ったので、参照されたい。

(4)閲覧業務

昭和六十一年下半期（七月～十二月）は、来館利用による入室者数が五、六四八人（一日平均三九人）、文献複写が一二、五七三件（一日平均八七件）で、相互利用（郵送による文献複写・貸出）の申込受付が八二四件であった。これを前年同期と比較すると、入室者数が二％増、文献複写が五％増とわずかな伸びに留まったのに対し、相互利用は四九％増と大巾な伸びを示した。

前回の報告において『学術雑誌総合目録　和文編』（一九八五年版）の刊行によって郵送による雑誌の文献複写申込の増加を予想したが、この数字は、早くもこの予想を裏づける結果となって現われたことを示すものである。

この四月からは、マイクロ資料目録データベース及び和古書目録データベースのオンライン検索サービスが開始されることにより、マイクロ資料及び和古書の複写申込件数がますます増加することが予想され、その受入れ態勢の整備が急務となっている。また、今年の七月には、開館十周年を迎えることになり、さらにサービス向上を図るべく努めていきたい。

(5)マイクロ室業務

加賀市立図書館（聖藩文庫）他一九文庫、五九八リール（ロールフィルム。一巻、六百コマ。作品数平均五～六点収録。）の作業用ネガフィルムを作製した。閲覧用ポジフィルムは、多和文庫、宇部市立図書館（新井文庫）等二〇文庫、七三七リールを作製し、整理を行った。紙焼写真本は、七一〇冊の製本、装備を行った。

(二)参考室

日常業務として、参考質問の受付・回答に従事し、参考図書の充実と参考開架閲覧室の維持にあたった。

国文学の普及活動として、次のとおり公開講演会・展示を開催した。

●第9回夏期公開講演会「軍記物語の展開」（7月24日～26日、於当館。講演集刊行の予定）

24日　「『保元物語』『平治物語』の琵琶語り」犬井善壽（筑波大学助教授）、「平家物語(二)―語り物・その生態―」水原一（駒沢大学教授）。

25日　「平家物語(二)―その生成と変貌―」松尾葦江（鳥取大学助教授）、「『太平記』と『太平記評判秘伝理尽鈔』」長谷川端（中京大学教授）。

26日　「軍記物の行方―室町・戦国軍記の展望―」加美宏（同志社大学教授）、「戦記絵巻について」宮次男（東京国立文化財研究所）。

●第25回公開講演会（10月18日、於松山市・子規記念博物館視聴覚室）「物語の作者と読者」伊井春樹（大阪大学助教授）、「子規と漱石」和田茂樹（子規記念博物館長）。

●第16回特別展示「古今集―初雁文庫本を中心として―」（11月1日～15日。『国文学研究資料館特別展示目録10』を刊行）

●常設展示

第32回「徒然草」（7月21日～10月18日および11月25日～12月20日）

（整理閲覧部長）

委員会日誌

昭和六十一年

9月8日　国際日本文学研究集会委員会（第二回）

9月30日　情報処理システム運用委員会（第三回）

11月13日　国際日本文学研究集会委員会（第三回）

12月12日　共同研究委員会（第二回）

12月16日　大学院教育協力委員会（第一回）

昭和六十二年

2月6日　共同研究委員会（第三回）

2月10日　収集計画委員会（第二回）

3月3日　情報処理システム運用委員会（第二回）

3月19日　古典籍総合目録委員会（第一回）

3月24日　文献目録委員会（第二回）

3月27日　大学院教育協力委員会（第二回）

評議員会議の開催について

本年度第一回及び第二回評議員会議が、次のとおり開催され、それぞれの議事について評議が行われた。

第一回

日程昭和六十一年十月二日(木)

議事一、管理運営の概況について

二、昭和六十年度事業報告について

三、昭和六十二年度概算要求について

第二回

日程昭和六十二年三月二十五日(水)

議事一、管理運営の概況について

二、昭和六十二年度予算内示について

三、昭和六十二年度事業計画について

運営協議員会議の開催について

本年度第二回、第三回及び第四回運営協議員会議が、次のとおり開催され、それぞれの議事について協議が行われた。

第二回

日程昭和六十一年九月十九日(金)

議事一、教官人事について

二、管理運営の概況について

三、昭和六十年度事業報告について

四、昭和六十二年度概算要求について

第三回

日程昭和六十二年一月二十七日(火)

議事一、教官人事について

第四回

日程昭和六十二年三月十日(火)

議事一、教官人事について

二、管理運営の概況について

三、昭和六十二年度予算内示について

四、昭和六十二年度事業計画について

海外出張等

外国出張

安永尚志

渡航先　西ドイツ

目的　世界コンピュータ会議

期間　昭和61年9月12日～昭和61年9月23日

安永尚志

渡航先　フランス

目的　政府間インフォーマティック政府間会議

期間　昭和61年10月19日～昭和61年10月24日

安永尚志

渡航先　フランス・イギリス

目的　学術情報システム調査研究

期間　昭和61年10月25日～昭和61年10月30日

福田秀一

渡航先　西ドイツ・オーストリア・ハンガリー

目的　日本学概論及び日本文学の研究

期間　昭和62年1月18日～昭和62年8月31日

研修旅行

田嶋一夫

渡航先　中華人民共和国

目的　中国科学院において日本語処理に関する講演を行う

期間　昭和62年1月21日～昭和62年1月30日

人事異動（昭和六十一年九月～昭和六十二年三月）

（採用）昭和六十一年十月一日付

文部教官（助手）宮崎修多

（併任）昭和六十一年十月一日～昭和六十二年三月三十一日

文部教官（文献資料部助教授）田村憲治（愛媛大学法文学部助教授）

昭和62年度共同研究実施予定

研究課題	氏名	勤務先・現職
平安前期物語の研究	吉海　直人	文献資料部　助手
	藤井　貞和	東京学芸大学教育学部　助教授
	高橋　亨	名古屋大学教養部　助教授
	菊地　仁	山形大学人文学部　助教授
	植田　恭代	日本女子大学大学院　博士課程
	櫻井武次郎	親和女子大学文学部　教授
	清登　典子	放送大学埼玉学習センター　助教授
	藤田　真一	京都府立大学女子短期大学部　助教授
	母利　司郎	文献資料部　助手
	塩崎　俊彦	神戸山手女子短期大学　講師
	森田　蘭	四国女子大学附属図書館長
	渡辺志津子	大阪大学文学部　助手
	宮崎　修多	研究情報部　助手
江戸中期上方文壇の研究	井上　宗雄	立教大学文学部　教授
	佐藤　恒雄	香川大学教育学部　教授
	紙　宏行	文教大学女子短期大学部　専任講師
	兼築　信行	早稲田大学高等学院　教諭
	山田　洋嗣	立教高等学校　非常勤講師
中世歌合の研究	今井　明	早稲田大学大学院　博士課程
	湯浅　忠夫	学習院大学大学院　博士課程
	流石　文	立教大学大学院　博士課程
	中川　博夫	慶應義塾大学大学院　博士課程
	福田　秀一	文献資料部　教授
	鳥越　文蔵	早稲田大学文学部　教授
	土田　衛	大阪女子大学文学部　教授
	原　道夫	明治大学文学部　教授
歌舞伎番付総合目録の標準化と編纂のための基礎的研究	武井　協三	園田学園女子大学　助教授
	古井戸秀夫	早稲田大学文学部　専任講師
	林　公子	大阪大学大学院　博士課程
	赤間　亮	早稲田大学大学院　修士課程修了
	棚町　知弥	研究情報部　教授
	堀　浩一	研究情報部　助教授
	嶋中　道則	東京学芸大学　助教授
	市古　夏生	白百合女子大学文学部　助教授
	揖斐　高	成蹊大学文学部　教授
	鈴木　淳	國学院大学日本文化研究所　助教授
	林　達也	駒澤大学文学部　教授
	島原　泰雄	文献資料部　助手
	和田　道子	日本学術振興会　特別研究員
	古相　正美	國学院大学日本文化研究所　嘱託研究員
	清水　素子	
江戸時代堂上和歌聞書の研究	鈴木　健一	東京大学大学院　博士課程
	坂内　泰子	東京大学大学院　博士課程

研究課程	氏名	勤務先・現職
協力者	白石　良夫	文部省教科書調査官
	菊地　明範	中央大学修士課程
	上田　真	スタンフォード大学教授　当館客員教授
	佐伯　彰一	中央大学文学部教授
※日本文学の特質 —日本文学における「終わり」の感覚—	高橋　亨	名古屋大学教養部　助教授
	三好　行雄	大妻女子大学文学部　教授
	百川　敬仁	研究情報部　助教授
	山中　光一	研究情報部　教授

※昭和61年度の共同研究であるが、前号の報告に間に合わなかったのでここに戴せた。（公募採択課題以外）

第十回国際日本文学研究集会スナップ

昭和六一年度の集会は十一月十三日から三日間にわたって行われたが、参加者は一五〇名を越えて、これまでにない盛会となった。

左はそのおりの寸景。上の写真は二日目のシンポジウム、下は三日目の公開講演のときの会場の様子の各々一端を伝える。

利用者へのお知らせ

◆マイクロ資料複写の原資料所蔵者への事後報告について

マイクロ資料のサービス区分A・Bのうち、所蔵者との取り決めにより、所蔵者へ事後報告を必要とするものがあります。

今まで所蔵者への事後報告は、当館で複写した利用者の氏名・資料名・複写方法等を記入し、年度ごとに取りまとめて所蔵者に報告していました。

昭和六十二年四月から、複写申込の際、利用者の方に「資料複写サービス報告書」に、氏名・資料名・複写方法等をご記入いただき、それを当館から所蔵者へ送付する、という方式に変更いたします。ご面倒ですが、よろしくご協力の程お願いいたします。

◆所蔵目録刊行のご案内

このたび『マイクロ資料目録』『和古書目録』『逐次刊行物目録』の最新版が刊行されましたので御案内いたします。

(1)『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八六年』(第十冊)

この目録には、二八所蔵者（文庫）分、八、三九七点が収録されています。そのうち一九所蔵者（文庫）が、今回新たに収録されるものです。

収録所蔵者（文庫）は、次のとおりです（＊印は新規収録分）。

文庫No.	所蔵者
33	東洋文庫
34	神宮文庫
66	大阪府立中之島図書館
86	＊市立飯田図書館（市丘家）
99	高知県立図書館（山内文庫）
204	静岡県立中央図書館（葵文庫）
209	富山県立図書館（志田文庫）
215	＊島根大学附属図書館（桑原文庫）
216	学習院大学国語国文学研究室
219	麗沢大学図書館（田中文庫）
227	＊University of Cambridge Library
228	＊大阪大学附属図書館（忍頂寺文庫）
229	＊鶴岡市郷土資料館
240	＊武生市立図書館
241	＊The Library of Congress
242	京都女子大学図書館（吉沢文庫）
243	＊彦根市立図書館（琴堂文庫）
249	＊Bibliothèque Nationale
251	＊会津若松市立会津図書館
252	＊秋田県立秋田図書館（時雨庵文庫）
257	＊大和文華館
258	＊臼杵市立臼杵図書館
261	＊多久市教育委員会（聖廟附属資料）
262	＊多久市教育委員会（多久家資料）
263	＊多久市教育委員会（副島家資料）
264	＊多久市教育委員会（鴨打家資料）
オ5	＊小保内道彦（稲荷文庫）
ク3	＊久保田淳

(2)『国文学研究資料館蔵和古書目録一九七二―一九八六』

この目録は、今まで刊行した『和古書目録一九七二―一九八一』『同増加1（一九八二）』『同増加2（一九八三）』『同増加3（一九八四―一九八五）』の四冊分を累積し、その後一年間の増加分一〇〇余点を加えた和古書（写本・版本）約六、〇〇〇点を収録したものです。

(3)『国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録一九八七年』

収録誌数は、前年分より一四〇誌増え、三、一七五タイトルで、昨年十月末までの受入れ分が収録されています。それ以降の受入れ分については、カウンターで係員におたずねください。

◆新指定貴重書

このたび次の資料六点が新たに貴重書に指定されました。これによって当館の貴重書は、計六九点となりました。

- 『澄印草等』（写）
- 『井蛙抄』（写）
- 『大黒舞』（写）
- 『儒者書牘集』（写）
- 『三矼亭集書画帖』（写）
- 『新古今和歌集』（写）

◆特別コレクション「国学者自筆稿本等」の追加指定

またこのたび、富士谷成章『あゆひ抄』他九点が「国学者自筆稿本等」に追加指定されました。

◆マイクロ資料目録の市販について

『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八五年（縮刷版）』（第九冊）が笠間書院より刊行され市販されています（定価六、五〇〇円）。

昭和六十二年度春季学会開催一覧

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の春季大会予定は次のとおりである。学会掲出は五十音順。以下①事務局、②大会開催日、③会場。②③の記入のない学会は大会予定無しか、または大会期日未定。

解釈学会　①〒一七〇豊島区北大塚三―二九―二教育出版センター内

近代語学会　①〒一六〇新宿区北新宿三―一〇―一〇―五〇七

国語学会　①〒一〇一千代田区神田錦町三―一一武蔵野書院気付②五月二三～二四日③神戸大学

古事記学会　①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部日本文学第二研究室

古代文学会　①〒一六四中野区中野五―一九―一六―二〇五西條勉方

上代文学会　①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部尾畑研究室内②五月一六～一八日③武庫川女子大学

説話文学会　①〒一五四世田谷区駒沢一―二三―一駒沢大学文学部国文学研究室内②六月二六～二七日③札幌大学

全国大学国語国文学会　①〒一〇一千代田区猿楽町二―八―一三桜楓社気付②六月一三～一四日③成城大学

中古文学会　①〒一七一豊島区目白一―五―一学習院大学国語国文学研究室内②五月九～一〇日③国学院大学渋谷校舎百周年記念会館

中世文学会　①〒一六〇新宿区西早稲田一―六―一早稲田大学教育学部梶原研究室内②五月三〇～三一日③成城大学

日本演劇学会　①〒一六〇新宿区西早稲田一―六―一早稲田大学演劇博物館内②五月一六日③ゲーテ座記念岩崎博物館

日本歌謡学会　①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第七研究室内②五月九～一〇日③清泉女子大学

日本近世文学会　①〒一五四世田谷区駒沢一―二三―一駒沢大学文学部富士昭雄研究室内②六月二〇～二一日③明治大学文学部

日本近代文学会　①〒一九二―〇三八王子市東中野七四二―一中央大学文学部国文学研究室②五月二三～二四日③国学院大学

日本口承文芸学会　①〒一六〇新宿区西新宿八―四―五財団法人ラボ国際交流センター広報部気付②六月六～七日③奈良文化会館小ホール

日本文学協会　①〒一七〇豊島区南大塚二―一七―一〇

日本文学風土学会　①〒二一四川崎市多摩区東三田二―一―一専修大学文学部国文学研究室内

日本文芸研究会　①〒九八〇仙台市川内東北大学文学部内②六月一三～一四日③東北大学文学部

俳文学会　①〒六〇五京都市東山区東山七条京都女子大学文学部浜千代研究室内

表現学会　①〒四八〇―一一愛知県愛知郡長久手町愛知淑徳大学国文学科研究室内②五月二三～二四日③梅花女子大学

仏教文学会　①〒一〇二千代田区三番町六番地二松学舎大学（東部）〒六〇〇京都市下京区七条大宮龍谷大学（西部）②四月二五日③二松学舎大学

万葉学会　①〒五六五吹田市千里山東三関西大学国文学研究室内

美夫君志会　①〒四六六名古屋市昭和区八事本町一〇一中京大学文学部国文学研究室内

和歌文学会　①〒一一三―九一文京区本郷郵便局私書箱第二八号

館報入手ご希望の方は

郵便番号、あて先、氏名を明記のうえ、郵送料(切手)を同封して当館情報室あてお申し込み下さい。

国文学研究資料館報　第二十八号
昭和六十二年三月発行
編集・発行者
国文学研究資料館
東京都品川区豊町一―一六―一〇
郵便番号一四二
電話(七八五)七一三一（代）
印刷所　株式会社　三興